

平成21年度 第1回山梨県立図書館協力会研修報告

高橋 大城

■日 時 平成21年9月30日(水) 午前13:30~15:30

■場 所 山梨県立文学館

■参加者 県立図書館協力会会員 15名(五十音順・敬称略)

浅川八重子、石川順子、上原公子、大橋千鶴、桂嶋恵美、甲田誠、高橋大城、田中裕子
中村澄可、野口正樹、深澤啓子、三井芙美江、望月羊子、山縣仁美、横内幸枝

県立図書館職員 2名 山形リーダー、柳本非常勤嘱託

ひさしぶりの秋の長雨で芸術の森の草木も息を吹きかえし、人々は憂愁を感じながら参加申込者の全員が出席しました。

ここで協力会としての報告をまとめてみました。参加できなかった方々にも雰囲気をお伝えできればと思います

第1回目の企画としては大成功であったと思っています。

とりわけ企画展「樋口一葉と甲州」を学芸員小林さんの解説で展示品を観てまわりました。展示されていた遺品には「なつかしさ」を感じ「ノスタルジー」にひたることができました。日本人らしい情緒の「ふるさと」への共感が感じられ、各々の見学者に共振するのかなと思いつつ一周しました。

時間の制約もあり、常設展は足早でしたが、秋山秋紅蓼の展示には興味がわき、回帰、共感するものがありました。また、後日ゆっくりみたいと思いました。

出口で掛け軸「誰彼もあらず一夫自尊の秋」が印象に残りました。

帰宅して調べたら次の通りでありました。参考までに蛇笏の最後の一句であるとのこと。龍太氏の解釈がありました。

意志を継がれた四男の飯田龍太氏は明解します。

「季節はいままさしく秋爽。たまたまこの世にえにしありともがらよ、ひとの生死のはかなさよりも、おのがじし尊ぶべきものは何であったか、それをこそ互いに求めようではないか」、蛇笏生涯の終極をくまどらせて鎮めるばかりではなく、誰彼の生涯をも終極させる精神的純度を示しています。(引用)

会員の感想欄

◇ ◇ ◇

◎ (高橋)

予算の削減で書庫の消毒が1年1回から隔年になり、収集品の保持を心配しているのが印象的であった。

◎ (三井・石川・大橋)

展示の説明や書庫の見学は大変有意義でした。時間設定をもう少し考えて、協力員の交流をとれたら良かったと思います。

◎ (野口)

文学館員の方々の説明が非常に分かり易く魅力的で、かつ協力員の方々も熱心で興味深く研修したこともあって、予定の時間がまたたく間に過ぎてしまい、大幅に延長になる程熱意あふれる研修となりました。

第一回としては大成功だった、と自負しています。その分協力員間の交流時間が不足したことは反省点として次回以降に反映したいと思います。